

中之島香雪美術館所蔵「稚児観音縁起」の主題について

— 極楽往生と十一面観音信仰の關係に着目して —

小池寧々 (須坂市役所文化スポーツ課)

中之島香雪美術館所蔵の「稚児観音縁起」(以下、本絵巻)は、弟子を求めて長谷詣を行った興福寺別院・菩提院の老僧(上人)と、観音菩薩の化身である稚児の出会いと死別、菩提院における稚児の供養と稚児観音の出現の物語を絵画化する、鎌倉時代末期(14世紀)の絵巻である。

この物語は『長谷寺靈驗記』(13世紀)第22話を典拠とするが、内容には多くの差異がある。両者の比較により、本絵巻については、稚児と老僧の恋物語、菩提院への参詣を促す寺社縁起、あるいは上人の性質は解脱房貞慶(1155~1213)に着想を得ているというような可能性が提示されてきた。しかし、先行研究での比較は内容の一部にとどまり、モチーフの検討も十分とは言えない。これを踏まえ本発表では、詞書と絵画表現の検討から本絵巻の主題を新たに提示したい。

まず詞書については、典拠の『長谷寺靈驗記』にない文章の挿入に注目する。特筆すべきは、その改変により上人と稚児の性質に変化がもたらされる点である。典拠にない行動や感情の表現により、稚児の死に対する悲しみや追善供養の描写が強調され、また上人の往生する場所が補陀落山から極楽浄土に変わる。阿弥陀如来との関連を示唆する描写が稚児に加えられるほか、稚児は発心に導く存在から極楽へ導く存在へと変化する。

絵画表現における注目点は、稚児の死後の法会に集まる聴衆である。特に子供に背中を搔かせる老人の傍の黒点に注目すると、「粉河寺縁起」(和歌山・粉河寺)、「遊行上人絵」(山形・光明寺)の皮膚病の人物の周囲に同様の黒点があることから、これが瘡であると分かる。中世における瘡平癒のための入湯の習慣、追善供養と湯施行との結びつき等を考慮すると、法会の場面の老人は、追善供養の行事とともに設けられる風呂にあずかる人をあらわすとみられる。

また、稚児観音が十一面観音菩薩の姿で出現する菩提院持仏堂の場面には、定印を結ぶ阿弥陀如来坐像と蓮池図が描かれることから、この場が極楽浄土に擬されていると分かる。さらに稚児観音に付随する雲は蓮池図から伸び、極楽浄土から飛来する十一面観音菩薩として表現されていると推測できる。この表現は、貞慶の思想の影響が指摘される補陀落山を背に来迎する十一面観音菩薩を描く例とは異なり、13~14世紀初頭の僧俗を交えた造像願文に見られる、十一面観音菩薩に対して、ただ極楽往生の導き手となることを期待する信仰に通じる。

以上から、本絵巻は、寺社縁起であるにとどまらず、追善供養の重要性の強調と、稚児観音との結縁による極楽往生の達成を主題にしていると考えられる。さらに、補陀落山を経由せずに極楽から直接引接する十一面観音菩薩の描写は、易化した往生信仰に基づく十一面観音信仰を表現すると認められる。本発表を通し、本絵巻が鎌倉時代の観音信仰の一形態を絵巻化した重要な作例であることを提示したい。